

# 大学史研究通信

第72号、2012年11月16日(金)

大学史研究会

第72号の内容：会員ニュース・新入会員自己紹介・第35回大学史研究会セミナー報告・2012年度総会報告・2012年度会計報告・ロジャー・ガイガー教授講演会のお知らせ・在外研究報告・会員新刊ニュース・会員からの情報提供・『大学史研究』編集委員会からのお知らせ・事務局からのお知らせ・退会者の報告・編集後記

## 会員ニュース

### 新入会員

#### 大森 東亜 会員

所属：米欧亜回覧の会（元明治大学事務職員）

研究テーマ：(1)各国比較高等教育、(2)日本高等教育史と藩校、(3)アメリカ大学史

#### 原 圭寛 会員

所属：慶応義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程

研究テーマ：(1)19世紀～20世紀前半のアメリカ大学史、(2)リベラル・アーツ・カレッジの機能と学生の動向、(3)アメリカ専門職養成史

#### 岡崎 匡史 会員

所属：日本大学大学院総合科学研究科

研究テーマ：(1)比較政治学、(2)日米占領史、(3)「水」の地政学

#### 和田 正法 会員

所属：東京工業大学大学院社会理工学研究科（院生）

研究テーマ：(1)工部大学校、(2)工学史

#### 田中 智子 会員

所属：立教大学立教学院史資料センター

研究テーマ：第二次大戦後における大学学生自治会の形成過程

## 新入会員自己紹介

### 大森 東亜 会員

60年代中期、永井道雄氏が『日本の大学』を出した頃、たまたま同氏から話を聞く機会があり、日本の大学に構造的な問題があるほか、英国では政治家が大学について真剣に議論していること、またアメリカでは浩瀚な大学セルフ・スタディ作成されていることなどを教えられた。その後、70年代に入りベトナム戦争やアメリカの反戦運動などの影響もあって大学紛争が欧米から日本にも波及し、「大学問題」が社会問題化するとともに、大学が政治問題化した。大学改革問題が百家争鳴の時代を迎え、試行錯誤を経て現在、日本の大学は60年代の大学と比較していろいろの面で様変わりし、大学のセルフ・スタディも実施されている。この間小生

は、『IDE・現代の高等教育』誌を通じて内外の様々の大学情報に接してきましたが、いま大学について考えたいことは少々手に余りますが、「教養教育内外比較」、「日本高等教育史と藩校」などがあります。

先学諸氏からのご教示をお願いいたします。

#### 原 圭寛 会員

慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程に在学しております、原圭寛（はらよしひろ）と申します。19世紀中葉から20世紀の初頭のアメリカのリベラル・アーツ・カレッジについて、学生の動向や専門職養成との関係性を見ながら、こうしたカレッジでの学びが学生にとってどのような意味があったのかについて、社会史的知見を可能な限り取り入れながら検討を行っております。そのうえで最終的には、戦後日本においてこのアメリカの高等教育がどのように理解され導入されたか、その理解にどのような齟齬が生じていたかを検討していきたいと考えています。これと関連して、日米の「教養」の概念史・思想史、日米の専門職養成史、ドイツからアメリカおよび戦前日本への研究大学理念の流入の経緯、アメリカから戦後日本への高等教育制度の移入などにも興味があります。大学史研究会には一昨年の京都で行われたセミナーに非会員ながらお邪魔いたしましたし、昨年は諸事情により参加できませんでしたが、今回改めて入会させていただくこととなりました。まだまだ未熟者ではございますが、皆様のご指導、ご鞭撻を賜ることができれば幸いです。何卒、よろしくお願い申し上げます。

#### 岡崎 匡史 会員

この度、大学史研究会に入会させて頂きました日本大学大学院総合科学研究科/ポスト・ドクトラル・フェローの岡崎匡史（おかざきまさふみ）です。核となる研究は、米国の対日占領政策ですが、人文系から社会科学まで幅広く勉強することを心がけています。

「専門」という言葉を使うことに対しては、抵抗感を抱いています。短い研究生活ではありますが、「専門」と聞くと、型にはまり、レールの上に乗っかって研究する官僚的な学者という印象が強く残っているからです。同様なことは、「学会」に対しても言えるかもしれません。しかし、大学史研究会は、稀な学会で、ホームページ上に記載されているように、「大学史研究会は、他の既存の学会ではともすれば失われがちな、会員間の忌憚のない学問的な対話と平等な人間的つながりを維持しております」という言葉に、「偽りはない」と今までのやりとりで確信しております。

現在では地球環境と紛争問題にも力を入れており、学際的かつ横断的な研究をするために、「水の地政学」(Geopolitics of Water)という新たな分野に取り組んでおります。そして、「大学史」の領域にも「占領」という観点から切り込んでいけたらと思っております。

#### 和田 正法 会員

このたび、岡田代表のお誘いいただき、大学史研究会に入会させていただきました。

学部は創価大学工学部、修士は創価大学大学院工学研究科で生物工学と、バージニア工科大学で科学技術社会論（通称 STS : Science and Technology in Society）を専攻しました。その後、東京工業大学大学院の博士後期課程に入学し、科学技術史を専攻しています。

私のこれまでの研究では、工部大学校に焦点をあててきました。工業や経営の関係者からは、「現場が大切」という言葉がよく聞かれますが、これまで同校が現場教育の起源として扱われ、高く評価されてきました。現在執筆中の博士論文では、この立場に批判を加え、工部大学校はむしろ学理面を重視したことに、同校を創設した工部省の意図と、工学史における意義があったことを論じたいと思っています。

これまで教育関連の研究会で発表などをしたことがありませんでしたので、大学史研究会で皆さまと交流できるのを楽しみにしております。よろしくお願いいたします！

## 田中 智子 会員

立教大学立教学院史資料センターで学術調査員をしております田中智子（さとこ）と申します。専門は日本教育史で、1950年前後の大学における学生自治会の形成過程を中心に研究を進めております。また今年、同センターに着任して大学史資料を扱う立場になったことから、大学史についてより深く学びたいと思い、今回入会させていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

## 第 35 回大学史研究会セミナー報告

2012年10月20日（土）・21日（日）、横浜市立大学（金沢八景キャンパス）にて大学史研究会第35回セミナーを開催いたしました。今回のセミナーは、会場の提供と設営について、出光直樹会員に全面的にお世話いただきました。2日間で31名（内、非会員9名）の参加がありました。なお、第35回セミナーの内容については、次号で詳しくご報告することとし、本報告では今年度セミナーの概要についてご報告いたします。

1日目のシンポジウムは、「日米における大学と地域社会の関係」と題し、吉川卓治氏（名古屋大学）、高橋寛人氏（横浜市立大学）、五島敦子会員（南山大学）、坂本辰朗会員（創価大学）にご発表いただきました。吉川氏からは「総力戦体制下における高等教育機関の設置と地域」と題し、なぜ戦前期に高等教育機関が大増設されたのかを地域との関係からご報告いただきました。また、高橋氏からは「戦後日本の公立大学と地域」と題し、戦後日本において、地域はなぜ大学を必要としたのかについてご報告していただきました。次いで、五島会員からは「20世紀前半アメリカの州立大学と地域—産学連携組織の形成に着目して」というタイトルのもと、20世紀前半の社会の変化に伴う大学の変化について産学連携の側面からご報告いただきました。最後に、坂本会員からは「アメリカ合衆国大学史におけるコミュニティ・ジュニア・カレッジ - 地域社会の高等教育機関とその矛盾 - 」と題し、アメリカにおける地域と高等教育機関の関係について、コミュニティ・ジュニア・カレッジを対象にご報告いただきました。報告後の討論では、フロアーから各パネリストへの質問がなされ、活発な討論が行われました。シンポジウム開催後は、懇親会（於：生協シーガル食堂）を行いました。

2日目の自由研究発表では、はじめに、和田正法会員（東京工業大学・院）により「工部大 学校再考 - 日本における学術的工学の成立 - 」という題目で発表が行われました。ついで、藤岡真樹（京都大学・院）から「大学と学知の歴史から見る冷戦初期のアメリカ合衆国」と題して、発表がなされました。最後に、岡崎匡史会員（日本大学）からは、「日本占領：マッカーサーのキリスト教化運動と大学改革」というタイトルで発表が行われました。今年度の自由研究発表では、三名の発表者ともに、若手の研究者による意欲的な発表がなされました。

第35回大学史研究会セミナーも、非常に充実した内容であったと思います。また、非常に快適にセミナーを開催することができました。ひとえに、開催準備校としてご尽力くださった出光会員のお蔭です。また、シンポジウムでご登壇頂いたパネリストの吉川氏、高橋氏、五島会員、坂本会員には、非常に有意義な内容をご提供いただきました。この場をお借りして改めて深く感謝申し上げます。

（事務局セミナー担当：井上美香子）

## 2012 年度総会報告

第 35 回セミナーに引き続き、2012 年度の総会が開催されましたので、その議事録を掲載いたします。

大学史研究会 2012 年度総会議事録

2012 年 10 月 20 日

於 横浜市立大学 ビデオホール

文責：岡田大士

### 1. 本年度の活動

#### 1-1. 事業報告

岡田局員より、本年度はニュースレター『大学史研究通信』を 3 号 (69, 70, 71 号) 刊行するとともに、第 35 回大学史セミナーを横浜市立大学で開催したとの報告があった。

#### 1.2 紀要『大学史研究』25 号について

岡田局員および古屋野編集委員長より、「教養教育の比較史的考察刊行研究」と題した特集およびノート(自由投稿)、書評をもとに、編集作業中であり、2013 年 3 月までに刊行したいとの報告があった。

#### 1-3. 2012 年度決算の報告・会計監査報告

会計補佐の山崎局員より、決算報告が行われたのち、意見交換が行われた。続いて監査の吉野剛弘会員より、今年度も問題なく会計業務が執行されていることが報告されたのち、決算が承認された。

### 2. 次年度の活動

#### 2-1. 事業計画

岡田局員より、次年度はニュースレター『大学史研究通信』を 4 号(72,73,74,75 号)刊行の予定とし、第 36 回大学史セミナーを中央大学後楽園キャンパスで開催することが提案された。また、2013 年 2 月頃に、アメリカの大学史研究者を招いたセミナーを共同開催することが提案された。

#### 2-2. 紀要『大学史研究』26 号について

岡田局員より 2011 年度セミナー「カレッジノベル—文学・小説からひも解く大学史—」を踏まえた特集を組むとともに、自由投稿原稿を受け付け中であることが報告された。

#### 2-3. 2013 年度予算の提案

山崎局員より来年度予算が提案されたのち、全会一致で承認された。

#### 2-4. 2013 年度事務局員体制の提案

岡田局員より 2013 年度事務局員体制に関する提案が行われた。会計担当の沖塩事務局員の退任に伴い、会計補佐であった山崎局員を会計担当にする旨の提案があり承認された。また、事務局員の交代に伴う本研究会の口座代表の名義変更についても承認された。

#### <事務局体制>

代表	岡田大士
会計・名簿	山崎慎一、浅沼薫奈
通信	五島敦子、長谷部圭彦
セミナー	井上美香子、深野政之

## 2012 年度会計報告

2012 年度会計ならびに 2013 年度予算案につきまして、以下に概要をご報告いたします。

### 2012 年度の収支報告

#### 【 収入 】

2011 年度会計からの繰越金は、3,993,501 円でした。2012 年度年会費につきましては、85 名の会員より納入いただき、年会費・入会金の納入総額は、561,000 円でした。今年度の年会費の納入率は 69.7%であり、昨年度より 0.5%減少しておりますが、ほぼ前年通りの納入率となりました。

年会費をお納め下さった会員各位におかれましては、この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後も引き続き研究会の発展と円滑な運営のために、年会費納入に対するご理解ご協力をお願い申し上げます。

その他の収入としましては、『大学史研究』（紀要）の売上金、28,640 円がありました。

2012 年度の総収入額としましては、4,638,376 円、前年度繰越金を除いた実収入額は、644,875 円でした。

#### 【 支出 】

編集委員会会議費・交通費は、29,302 円、事務局会議費・交通費は 102,691 円でした。事務局会議費・交通費は、前年度より支出が増加をしております。これは前回のセミナー時に、事務局員の活動に係る費用を抑制し過ぎているのではないかというご意見があり、適切な範囲において、事務局員間の連絡・コミュニケーションを取るようにしたためです。

印刷費は、17,980 円です。これは「大学史研究通信」発行の印刷、会員への諸連絡の印刷物、あるいは、年会費納入依頼通知の印刷等に関わる経費です。

通信費の支出は、74,480 円です。これは、「大学史研究通信」の発送、年会費納入依頼通知の発送、セミナーの出欠調査ハガキや、その他宅配便等の経費です。

消耗品費・手数料は、4,452 円です。これは、事務局運営にあたっての文房具・ラベル・用紙・送金手数料等の経費にあたります。

また、謝金として、31,000 円を支出いたしました。これは、「大学史研究通信」の発送等一度に大量の作業がある際のアルバイトの経費等となります。

次年度繰越は、4,378,471 円、来年度繰越金を除く総支出は 259,905 円でした。繰越金を除く収支の差は、384,970 円のプラスとなりました。ただし、このプラスは、今年度の会計報告時点では、大学史研究会紀要関連費用の計上がなかったこと及び、会計担当の引き継ぎ業務に伴い会計期間をやや早めたことによるものです。

「2012 年度会計報告」に明記されているとおり、当該年度の会計は吉野剛弘会員に監査を依頼し、精細な監査の上会計の適正処理をご承認いただきました。御多忙のところ監査業務を賜りました吉野会員には、この場を借りてお礼申し上げます。

## 2013年度の予算案

大学史研究会では、次年度の予算案につきましては、事務局による基本案を総会に提示し、ここでの審議を経て、最終決定をいたしております。

例年と同様、2013年度予算も上記の手順にしたがって予算案を決定しましたので、以下にご報告いたします。

### 【収入案】

収入は、年会費と紀要売上金の2つになります。とりわけ、本研究会の運営経費は、年会費の納入に大きく依存しております。

年会費につきましては、前年度並みの650,000円を収入予定額として設定いたしました。繰り返して恐縮ではありますが、2013年度も会員各位のご理解ご協力をお願い申し上げます。

紀要売上金は、昨年度までの売上金を参考に30,000円としました。このような金額を収入予定に組み込めるのは、編集委員会の方々のご尽力により売り上げを伸ばしていただいていることが関わっております。この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

なお、第35回セミナー開催費の戻し入れ額を50,000円と見積もっております。セミナー開催経費につきましては、後述の支出案をご参照下さい。

総収入額は5,109,471円、繰越金を除く総収入額は731,000円といたしました。

### 【支出案】

支出案は、例年の予算案で設定している支出項目と支出額を考慮しつつ、算出いたしました。『大学史研究』を発行する予定になっております。その発行経費（制作・印刷・発送費の総計）を550,000円計上しました。

編集委員会会議費・交通費は50,000円、事務局会議・交通費は昨年度の実績を踏まえ100,000円としました。

セミナー開催準備費は、セミナー開催に向けて事前に開催校にお預けする費用です。通常ですと参加費で経費は賄えますので、収入欄にも記載しましたように、翌年度そのまま戻し入れていただくことが想定されます。

その他の諸経費も、ほぼ例年通りの額を計上しております。消耗品費・手数料は10,000円、謝金及び印刷費は20,000円、通信費は75,000円でこれはホームページの費用も含んでおります。予備費として100,000円を計上しております。

2013年度から次年度への繰越金は5,109,471円、繰越金をのぞく総支出予算案は975,000円を予定しております。

本研究会におきましては、全体として緊縮財政をうたってはおりますものの、研究会として有益と認め得る支出につきましてはやぶさかではありません。大学史研究会の発展のため、あるいは、会員サービスのために必要な支出の要請がありました際には、事務局で検討し、それが妥当であると判断した場合には、これにお応えしていきたいと考えております。今後とも会員各位からのご提案ご教示を歓迎いたしますとともに、研究会の将来的なビジョンも併せてご検討いただければ、幸いに存じます。

以上、「2012年度会計報告」および「2013年度予算案」につきまして、ご質問ご提案等ございましたら、事務局までご連絡のほどよろしくお願い申し上げます。

（事務局会計担当：山崎慎一）


大学史研究会 2013年度 予算案

収入の部		支出の部		
費目	金額	費目	金額	
前年度繰越金	¥4,378,471	雑誌「大学史研究」関連費用	¥550,000	
年会費・入会金	¥650,000	編集委員会会議費・交通費	¥50,000	
「大学史研究」売上等	¥30,000	事務局会議・交通費	¥100,000	
第35回セミナー開催 経費等戻し入れ	¥50,000	研究会開催準備費	¥50,000	
利息	¥1,000	消耗品費・手数料	¥10,000	
		謝金(アルバイト)	¥20,000	
		印刷費	¥20,000	
		通信費	¥75,000	
		予備費	¥100,000	
		次年度繰越金	¥4,134,471	
計	¥5,109,471	計	¥5,109,471	
前年度繰越金を除く総収入		¥731,000	次年度繰越金を除く総支出	¥975,000

大学史研究会 総会 資料 (2012年10月20日：横浜市立大学)

大学史研究会 2012年度 会計報告  
(自2011年10月29日～至2012年8月24日)

収入の部		支出の部		
費目	金額	費目	金額	
前年度繰越金	¥3,993,501	編集委員会会議費・ 交通費	¥29,302	
年会費・入会金	¥561,000	事務局会議・交通費	¥102,691	
「大学史研究」売上等	¥28,640	印刷費	¥17,980	
第34回セミナー開催 経費等戻し入れ	¥54,414	通信費	¥74,480	
利息	¥821	消耗品費・手数料	¥4,452	
		謝金(アルバイト)	¥31,000	
		次年度繰越金	¥4,378,471	
計	¥4,638,376	計	¥4,638,376	
前年度繰越金を除く総収入		¥644,875	次年度繰越金を除く総支出	¥259,905
		上記収支差し引き		¥384,970

上記のとおり、ご報告いたします。 事務局会計担当 山崎慎一 

上記の会計報告について会計監査を実施した結果、領収書ならびに預金通帳等は、全て  
妥当かつ正確に処理されていることを認めましたのでご報告いたします。

会計監査  

## ロジャー・ガイガー教授講演会（2013年2月予定）のお知らせ

ペンシルバニア州立大学のロジャー・ガイガー（Roger L. Geiger）教授が2013年2月に来日され、講演会が開かれる予定ですので、会員各位にお知らせいたします。

ガイガー教授は、日本でも著名な高等教育研究の重鎮で、1993年から *Perspectives on the History of Higher Education* の編集を担ってこられました。近年では、大学と経済発展の関係をテーマとした数々の著作を刊行されておられます。日本の高等教育制度にも明るく、これまでに、4回、来日されました。

今回のご来日の主な目的は、平成23～25年度科学研究費補助金基盤研究（B）「知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証に関する国際比較研究」（研究代表者：東北大学高等教育開発推進センター高等教育開発部・羽田貴史教授）の一環として、アメリカの産学連携と大学史をテーマとする講演を行っていただくことです。ガイガー先生の講演は、東京、仙台、広島各セミナーで行われる予定です。

ついては、大学史研究会では、アメリカ大学史研究に関するセミナーを共催することになりました。日程は、以下の予定です。

### ■2月12日（火） 大学史に関するセミナー（東京）

講演時間および会場などの詳細については、次号の『大学史研究通信』でお知らせしたいと思います。

（事務局通信担当：五島敦子）

## 在外研究報告

ペンシルバニア州立大学において在外研究をされている福留東土会員から、「滞在記」を頂きましたので掲載させていただきます。福留会員は、このたび来日されるロジャー・ガイガー教授のもとでご研究されています。

日米大学比較史考—ペンシルバニア州立大学滞在記

福留東土（広島大学）

2012年4月よりペンシルバニア州立大学（Pennsylvania State University、ペンステート）にて1年間の在外研究を行っている。同大学の高等教育研究センター（Center for the Study of Higher Education）に客員研究員として籍を置き、大学史家のロジャー・ガイガー（Roger L. Geiger）教授の指導を受けながら、アメリカの大学に関する比較的研究に取り組んでいる。

大学院高等教育専攻でのガイガー教授の授業は、17世紀以来のアメリカ大学史を通観するもので、大学史に対する理解を深める上でまたとない材料を提供してくれる。私の関心は主に、19世紀後半におけるアメリカ大学の大変革期以降にあるが、アメリカ大学史については、それ以前の時代に対する理解を持つことのほうがより難しいということを今回改めて痛感している。19世紀後半以降の大学は、いわば学術と市場の論理によって動いており、それは現代の大学を動かす論理と通底する。しかし、それ以前のアメリカの大学は、古典教育と宗教の論理によって動いている面が大きい。現代大学の直接的な端緒を探る上では、変革期以降の時期



について理解していればとりあえずは事足りる（例えば、ランドグラント・カレッジのひとつであるペンステートの設立は 1855 年である）。だが、アメリカの大学における、いわば精神としての底流にある文化を理解する上では、それ以前の時代に対する理解が必要となる。しかし、古典教育の思想に根差す内容やキリスト教の宗派的精神に突き動かされる各カレッジの動きなどを感覚的に理解するのは、私にとってなかなか容易ではない。自分の研究関心に直接つながるテーマを深めると同時に、アメリカのカレッジ成立以来のこうした精神・文化に対する理解にどこまで近づけるか、残された期間での課題である。

こうした悩みとも関連することだが、今回の滞在では、アメリカの大学の「制度」を理解することはもちろん、同時にその「文化」に対する理解を深めたいと考えている。言うまでもなく、現代日本の大学研究および大学政策において、米国の大学は改革のモデルと位置付けられており、そのあり方は日本の大学のあり方にさまざまに影響を与えている。そこでは、アメリカの大学に対するとりあえずの制度的理解を元に、それを日本と比較して日本の欠点や遅れを指摘し、国際競争に勝ち抜くための改革の必要性を訴えるという構造が見られる。もちろん、アメリカの大学にはさまざまな優れた面があり、その制度をみているだけで、日本での改善の必要性を感じさせられることはしばしばである。だが、そうした制度は、大学の社会的位置付け、もっと言えば、人々が大学に対して抱くさまざまな思いに支えられて成り立っている。制度はその結果として表出化する現象に過ぎない。制度が優れている（ようにみえる）からといって、それを振りかざして、社会的・文化的背景の異なる場所に植え付けてみたところで、取って付けたような改革に終始するだけである。こうしたことは、日本の大学を取り巻く困難さに拍車を掛けているだけではないかと思うこともある。それよりも、制度の違いを、欠点・遅れと捉えるのではなく、「相違」として冷静に見つめて、日本の大学を支える精神や文化に根差した改革を進めることのほうがずっと重要ではないかと思う。

だが、一方で次のようにも思う。明治期以来の日本の社会発展を振り返れば、そこでは常に西欧文明とどう対峙するのかが重要な視点となってきた。先人たちは、西欧の「先進的」な制度や文化を、時にそのまま受容し、時に日本的な文脈に乗せて翻訳して取り入れてきた。西欧文明のインパクトは、良くも悪くも日本固有の伝統を解体・変容させ、良くも悪くも政治・経済・社会の「発展」を促してきた。西欧文明に対する憧憬・受容・反発などの複雑な感情は人々の内面で縋い交ぜとなって、大きく見れば日本社会の変動を促す主要な要因となってきた。今も我々の日常に溢れるカタカナ語はその象徴である。

そして、日本の大学史を振り返れば、そもそも西欧からのインパクトなくして、近代大学の制度が成り立っていたかどうかすら分からない。このことはアメリカの大学でも同じであり、ドイツからのインパクトなくして、19 世紀後半における研究大学の成立はあり得なかった。それ以前のカレッジのあり方もそもそもはイングランドの大学のあり方を新大陸に持ち込んだものであり、スコットランドからの強い影響もあった。もちろん、それらはともに（日本と同様）、アメリカ独自の社会構造の中で変容しつつ、独特の発展を遂げていったのである。歴史的に見たときに、諸外国からの影響は、各国の大学のあり方を規定する本質的な要因であったとも言っているのである。

こうした様々なことを私の立場に即して考える上で、先に述べた、アメリカの大学を支える文化に対する理解を深めることが重要ではないかと考えている。それによって、各国の大学を取り巻く文脈への視座が得られるのではないかと考えるからである。制度の背後にある文化的背景を理解することはもとより簡単なことではない。しかも、アメリカの大学を見る上で壁として立ちちはだかるのは、その高度な多様性である。ある大学では当たり前とされる現象が他の大学ではまったく違った形で顕現することも少なくない。だが、この多様性とそれを造り出した条件こそ、アメリカの大学の活力を生み出す根源にあることも次第に理解しつつあるところ

である。

今の私はまさに「犬かき」とでも形容しうる状態にあり、遅々たる歩みを痛感せざるを得ない。またおそらく、アメリカの大学に対する私の理解は、どう努力してもアメリカ人の持つそれと同じものにはなりえない。しかし、むしろ日本との比較の視点を持っていることを強みとして活かすべきなのだろう。いずれにしても長期的課題にならざるを得ないが、ペンステートでの生活を通して、その課題に取り組むためのきっかけを掴んで帰りたいと思っている。

## 会員新刊ニュース

岡崎匡史『日本占領と宗教改革』学術出版会、2012年7月。

シェイラ・スローター、ゲイリー・ローズ著、成定薫監訳、阿曾沼明裕、杉本和弘、羽田貴史、

福留東土訳『アカデミック・キャピタリズムとニュー・エコノミー：市場・国家・高等教育』法政大学出版社、2012年11月。

## 会員からの情報提供

富岡勝会員（近畿大学）より、以下のご案内を頂きました。

『1880年代教育史研究会年報』第4号のご案内

1880年代高等中学校の成立過程や専門教育の再編成などを検討している「1880年代教育史研究会」（会員：荒井明夫・神辺靖光・谷本宗生・小宮山道夫・田中智子・鄭賢珠・佐喜本愛・三木一司・福井淳・富岡勝）は、年1回のペースで、『1880年代教育史研究会年報』を発行しています。2012年10月に、「1880年代における高等普通教育と専門教育の再編IV」を特集する第4号（全160頁）が完成しました。目次や入手方法は、下記サイトをご覧ください。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/index.html>

お申し込みの方には、送付料200円のみのご負担で、第2号～第4号を送付いたします。

第1号は品切れですので、上記サイトよりPDFファイルをダウンロードしてください。

## 『大学史研究』編集委員会からのお知らせ

『大学史研究』編集委員会では、25号の編集ならびに26号の企画を検討しております。詳細は、総会報告をご覧ください。自由投稿論文につきましても随時受付しておりますので、担当事務局員の岡田宛て（電子メール：daishi@home.nifty.jp）にご連絡ください。

## 事務局からのお知らせ

おかげさまで今年も大学史セミナーを開催することができました。来年度は中央大学後楽園キャンパスにて開催の予定です。関東圏で続いてしまいましたが、再来年の開催地はまだ決まっておりません。開催地の立候補をお願いいたします。

## 退会者の報告

以下の会員が退会されました。これまでのご協力を御礼申し上げます。

佃 隆一郎 会員

## 編集後記

本号は、これまで以上に盛りだくさんの内容となりました。ご寄稿くださった方々に御礼申し上げます。研究セミナーの成功も、新入会員の方の増加も、嬉しいニュースです。来年2月には、ロジャー・ガイガー教授の講演会が予定されていますが、まさに現在ガイガー教授のもとでご研究されている福留東土会員からの「滞在記」も掲載することができました。また、富岡勝会員からも、貴重な情報を頂きました。このようなご寄稿は随時受け付けておりますので、会員の皆様からの御原稿をお待ちしております。

(事務局通信担当：長谷部圭彦)

『大学史研究通信』第72号の編集は事務局・長谷部圭彦が担当いたしました。

連絡先：hasebekiyohiko@hotmail.com

『大学史研究通信』第73号は、2013年1月31日発行予定です。

## 大学史研究会事務局

<事務局連絡先>

〒 192-0393 東京都八王子市東中野 742-1

中央大学法学部 研究室受付 岡田大士気付 大学史研究会

Tel&Fax: 042-674-3151 E-mail:daishi@home.nifty.jp

ホームページ <http://daigakushi.jp/>

事務局へのお問い合わせは、なるべく下記代表 E メールアドレスまでお願いいたします

E-mail: jshshe@daigakushi.jp

## 大学史研究会事務局員 (五十音順)

浅沼 薫奈 (大東文化大学)

井上 美香子 (九州大学大学図書館百年史編集室)

岡田 大士 (中央大学)

五島 敦子 (南山大学)

長谷部 圭彦 (東京大学)

深野 政之 (一橋大学)

山崎 慎一 (桜美林大学)